

教材としての絵本（その二）

へよみまかせのポイント

『いたずらこねこ』（福音館書店）

バーナデイン・クック ぶん

レミイ・シャーリップ え

まさき るりこ やく

二〇〇一年四月二一日

但馬サークル特別講座

講演 西郷竹彦

二〇〇一年七月

文芸研 編集

# 教材としての絵本（その一）

〈よみかき〉のポイント

『いたずらこねこ』（福音館書店）

バーナディン・クック ぶん

レミイ・シャールップ え

まさき るりこ やく

二〇〇一年四月二一日

但馬サークル特別講座

講演 西郷竹彦

## 図の取り方

この「いたずらこねこ」という絵本は文と絵からできていまして、これを専門用語では言語形象と絵画形象といえます。語り手が語ることは描かれている。それと対応して絵描きさんが絵を描いている。こ<sup>り</sup>いうふうなものです。これは左開きの、横長の、外国の絵本の翻訳ですから、文章は横に書かれています。左から右へ、左から右へと書かれています。ですから物語の場面も左から右へ、左から右へと進んでいきます。

（見開きで引用しますが、スペースの関係で、絵の左右の距離をちぢめてあります。）

最初の①に〈かめ〉が登場します。

青い池があつて（ちなみに、この絵本は、すべて白黒で、池だけがあざやかな青色です。）

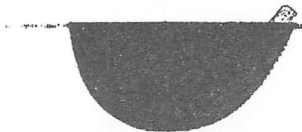
反対の所には隣の家の板べいがある。

それで、こちらの池にかめが住んでいて隣の家へこねこが住んでいる。

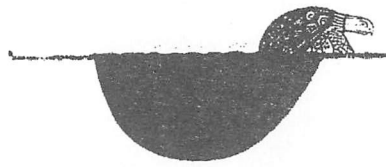
というわけで、まず、かめの紹介、次にこねこの紹介ということになるわけですね。

①

あるところに、かめか いました。  
この かめは、おおきな かめでは ありませんでした。  
ちゆうくらいの かめでも ありませんでした。  
ほんの ちいさな かめでした。  
この ちいさな かめは、  
ちいさな にわの、ちいさな いけに すんでいました。



②  
 となりの うちには こねこが いました。  
 この こねこは、おおきな こねこでは ありませんでした。  
 ちゅうくらのいの こねこでも ありませんでした。  
 ほんの ちいさな こねこでした。  
 そして この こねこは、とても いたずらな こねこでした。



②のこねこの紹介のところを見てくださ

い。  
 へとなりの うちには こねこが しまし  
 た。とあって、その次です。  
 へこの こねこは、 おおきな こねこでは あ  
 りませんでした。／ちゅうくらのいの こねこでも  
 ありませんでした。／ほんの ちいさな こね  
 こでした。／

この三行をへよみきかせるとすれば、  
 どういうふうに読み聞かせをするかという問  
 題です。

みなさんが教師として子どもの前でこの絵  
 本を読むとすると、どういう読み方をするか。  
 たとえば、どこで「間」をとるか。どこにア  
 クセント、力点をつけるか。まずはこの二つ  
 がだいじですね。

この文章で見るとへおおきなの次が切っ  
 てあります。「間」がとつてあります。へこね  
 こではの後に間がとつてあります。そうす  
 ると、ふつうだと、へおおきなで切つて、へこ  
 ねこではで切つて、へありませんでした。／  
 というふうに、たぶん読むだろうと思うんで  
 すね。そしてへちゅうくらのいの、こねこで切つて、へこねこでも、こねこで切つて、へあり  
 ませんでした。と、こういう読み方をすると思いますね、書いてある通りに読むとする  
 と。

でも、その読み方がまずいんです。  
 なぜか。  
 では、どういうふうに読んだらいいか。

**仕書**

そもそも、この三行は何を意図してこういうふうに書いてあるか。ほんの小さなこねこ  
 ということを強調したいのか。強調するために、大きなこねこでもないし中くらのこね  
 こでもない、ということをくり返し、そして、小さいこねこだということに焦点をしぼる。  
 こういうふう小さなこねこだということを強調するためだと、みんな考えている。でも、

それがまちがいなんです。

つまり語り手は何を目的としているのか。語り手の意図とありますが、何のためにこういうややこしい語り方をするか。「くりかえし」ですね。こういうのを「変化をとまなつて発展する反復」といいますけれども、その意図をつかまないと、読み方が決まらない。

たいていのみなさんは、こういうふうに読むんですよ。〈おおきな こねこではく、こねこで切って、〉ありませんでした。〈ちゅうくついの こねこでも、こねこで切って、書いてある通りに切って、〉ありませんでした。というふうには読むと思います。ふつうだとそういうふうには読みますね。

でも、そういう読み方はまちがいです。こういうふうには読むんです。〈この こねこは、おおきな こねこく、こねこで切るんです。こねこで切ると、聞き手はどう思うでしょう。大きなこねこかな、と思うんですね。まず、そう思わせておいて、そこで、〉ありませんでした。とひっくりかえしてやる。打つちやりを食わすわけですね。

それで、〈ちゅうくついの こねこくで切ると、あ、中くついの、こねこかな、と思う。そう思わせておいて、そこで、〉でも ありませんでした。と打ち消す。えっ？なんだ、中くついのこねこでもないのか、と。で、〈ほんの ちいさな こねこくというと、また打つちやりを食うと思つてしよう。そこで、〉でした。くという「えーつ」と、こうなる。

わかりますか。ぜんぜん、みなさんの考えている読み方とちがうでしょう。なぜ今、私は、みなさんの考える読み方とちがう読み方をしたかということ。結局、わざと、大きなこねこと思わせておいて、それで、どんでん返しを食わせる。そうすると子どもは「えーつ」と思うんですね。要するに、子どもをからかっているわけです。

語り手が子どもをからかうわけです。からかわれて、子どもは喜ぶ。ここで怒る子どもはいません。もちろん、こんなことを大人にやったら、大人は怒るかもしれませんが、「何、ふざけてー」というふうには。しかし子どもは喜ぶ。

たとえはすもうを取るのでも、わざと負けてやったりするでしょう。あるいは一回や二回は子どもを転がしておいて三回目には負けてやるとかね。本当にやれば三回とも勝つわけですよ。でも、子どもをわざとだますとか、子どもをからかうとか、打つちやりを食わすとか、そうすると、子どもは「あ、このおじさんはおもしろい人。このおじさんは自分をかまってくれる」と思うでしょう。

つまり、今私が読んだような読み方をすると、聞き手の子どもは「あ、この語り手はおもしろい語り手。この語り手のおじさんは、おもしろい話を自分たちにしてくれる」と期待するわけです。

期待させる、「これを「仕掛」といいますね。これはだいじなところなんですよ。

しかも〈この こねこは、とても いたずらな こねこでした〉というから、なお期待

③

まいにち、この かめは、  
にわを さんぼします。  
かめは、はやくは あるけません。あしが とても  
みじかいからです。だから、かめは、ゆっくり あるきます。  
それで、この ちいさな かめも、にわの なかを  
ゆっくり ゆっくり あるきました。



がもてるわけですね。「何かいたずらをするな、<sup>や</sup>どいういたずらをするんだらう」という  
ふう<sup>か</sup>に期待させる。こ<sup>か</sup>いうことなんです。

さて、次の④に「まいにち、この かめは、  
／＼にわを さんぼします。」とあって、「か  
めは、はやくは あるけません。あしが  
とても／＼みじかいからです。だから、かめ  
は、ゆっくり あるきます。」とあります。

これはもうわかりきったことですね。

なぜ、こんなわかりきったことをここで語  
り手が言うかというと、大事だからです、こ  
の後のために。この「ゆっくり あるく」と  
いうことを頭にとめておいてください。ゆっ  
くり歩くのだというイメージを、念を入れて  
与えているわけです。

「それで、この ちいさな かめも、にわの  
なかを ゆっくり ゆっくり あるきまし  
た。」この、ゆっくりゆっくり歩くというの  
は、実物の持っているリアルな姿ですね。し  
かし、語り手は何でもすべて語るわけじゃな  
い。後々必要になるから、ここで語っている  
わけです。わざわざ言わなくても、かめがゆ  
っくり歩くということは、子どもはよく知っ  
ていることですからね。よく知っているんだ  
けれども、それをあえて言うというのは、そ  
のことが後々だいじになってくるからです。  
このイメージがだいじだから、ここで念を入  
れて語っているわけです。

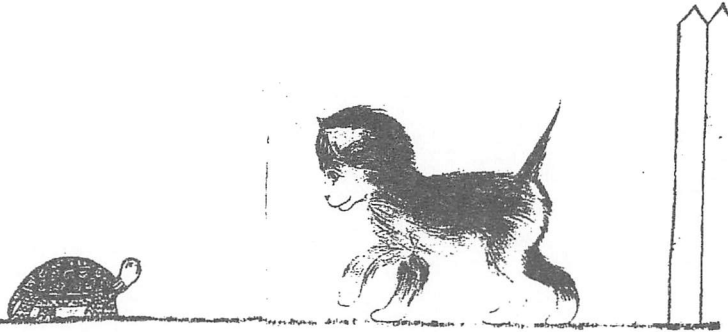
④

ときどき たちどまって、  
くびを もたげると、  
また、あるきだします。

あるひ、かめが、このようにして さんぽをしていると、

⑤

いたずらこねこが、にわの なかへ  
はいつてきました。



次の④⑤にいけます。

④へときどき たちどまって、くびをも  
たげると、／また、あるきだします。／あ  
るひ、かめが、このようにして さんぽし  
ていると、~~⑤~~いたずらこねこが、にわの  
なかへ／はいつてきました。

今までは語り手がかめによりそって語って  
いましたね。だから⑤でへいたずらこねこ  
が、にわの なかへ／はいつてきました。  
と語っています。ところが、いよいよ語り  
手は、かめの方よりは、どちらかというとな  
こねこの側によりそって語るといふ語り方  
をするんです。

言ってみると、この物語の主人公はこねこ  
なんです。でも、最初にかめのことを言っ  
ておいて、さて、そこへこねこを登場させて、  
そのこねこの一挙手一挙動がかめとの相関関  
係で問題になってくるわけなんです。

### 人物と読者の関係

次の⑥を読みますよ。

〈この こねこは まだ／かめを みたこと  
がありませんでした。〉

つまり読者はかめというものをよくを見て  
知っていますよね、幼稚園の子どもでも、で  
も、このこねこは知らない。

〈ほんの ちいさな こねこなので、／よ  
のなかを あまり しらなかつたのです。／  
こねこは おどろきました。／たちどまって、  
かめを ながめました。〉

ここで読者は、かめのことを知っている。  
人物こねこは、知らない。こういう関係が、  
まず、ここでできています。この関係がこの  
後ひじょうにだいじです。

かめという人物を読者は知っている、こね  
こという人物はかめを知らない。「読者は知  
っている、人物は知らない」という関係。こ  
の関係をここで語り手はキチツと作ったわけ  
です、わざわざ。

そうすると子どもはどうかというと、じぶ  
んはかめのことを知っているから、「えーっ、

このこねこはかめのことも知らないんだ！」と、こういう感じで、ちよつと見下したよう  
な感じで見るわけなんです。

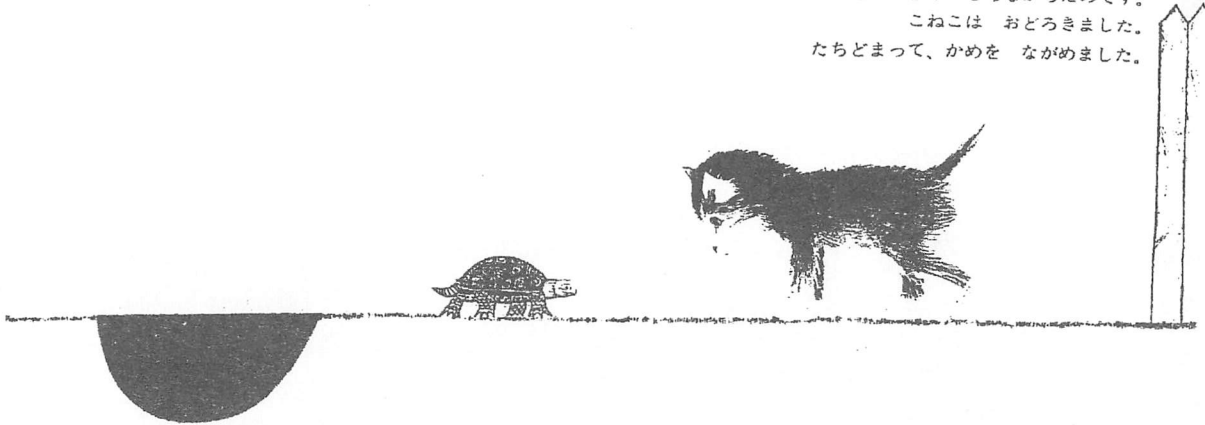
この人物と読者の関係というのはひじょうにだいじなんですよ。人物と読者の関係とい  
うのは四通りあって、その中の一つです。このことを、まずおさえておく。

だから、実際にこの絵本の指導をするときに「みんな、かめというのを知っているね」  
と言うと、子どもは何か言うでしょうね。「こうらがきたいよ」とか「すぐ首をひっこめ  
るよ」とか「あるくのがおそいよ」とか。それで「そうだね。でも、このこねこは何も知  
らないんだよ、まだ生まれて間もないからね」と、このことを確認しておくわけです。

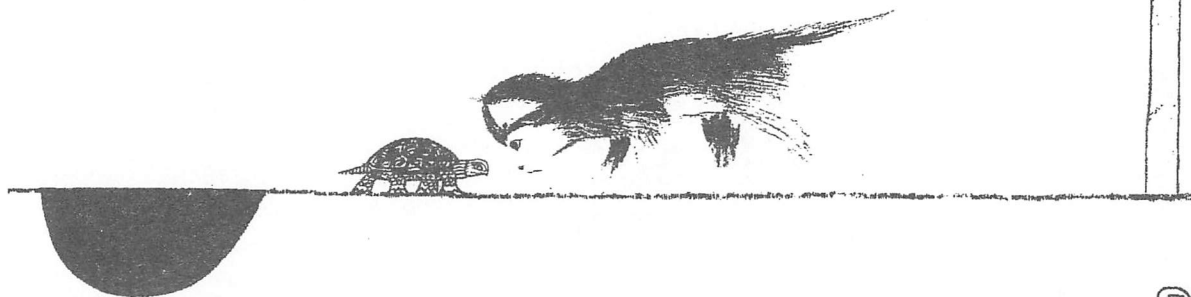
先へいきます。

⑥

この こねこは まだ  
かめを みたこと ありませんでした。  
ほんの ちいさな こねこなので、  
よのなかを あまり しらなかつたのです。  
こねこは おどろきました。  
たちどまって、かめを ながめました。



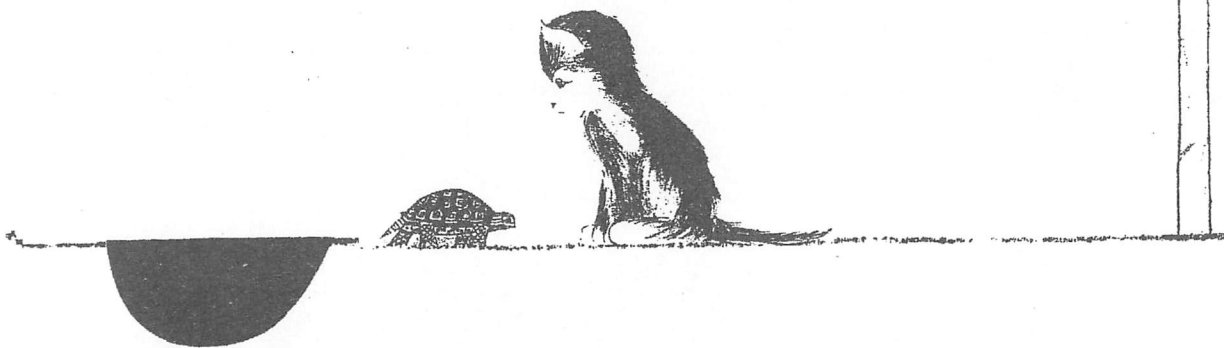
それから、すこし かめのほうへ ちかづきました。  
 ようじんしいい また もうすこし  
 ちかづきました。  
 なぜって、こねこには、この へんなものが、  
 なにものか よく わからなかったのです。  
 こねこが、かめの すぐ ちかくまで きたとき……



⑦(それから、すこし かめのほうへ ちかづ  
 きました。/ ようじんしいい また もう  
 すこし ちかづきました。/ なぜって、こね  
 こには、この へんなものが(笑)、語り手  
 はこねこによりそっているから、こねこの感  
 じ方ですと、こねこから見ると(へんなもの)  
 と見えるんですよ。だから(へんなものが、  
 / なにものか よく わからなかったの  
 ず。)となる。

でも読者は知っているから「へえ、なんだ、  
 このこねこは、わからんのか!」と、こうな

⑨ こねこも、たちどまりました。  
 かめは、こねこを みつめました。  
 こねこも、かめを みつめました。  
 そして……



⑧ かめは、たちどまりました。

ります。これが読者の体験の仕方です。

「人物は知らない、読者は知っている」  
 という関係があるから、読者はこのねこの  
 ことをちよつと小バカにして「なあんだ、  
 このこねこは、かめのことを(へんなもの)  
 なんていつてるけど、へんなものじゃない。  
 かめだよ」と教えたくなる感じですよ。

「こねこが、かめの すぐ ちかくまで  
 きたとき」さあ、何が起きたんでしょう。

「ちかくまで きたとき」というと何か起  
 こりそうでしょう。「何がおこるとおもう?」



と、わざとかくして、一人で「ははーん……」(笑)と絵を見てうなずく。

### ゆっくり、切って読む

⑧(かめは、)なんでしょう？(たちどまりました。と、こうやる。

⑨(こねこも、たちどまりました。かめは、こねこを みつめました。／こねこも、かめを みつめました。みなさん、こねこを見てください。こねこは、わざとことばをゆっくり一つずつ切って読むのです。(こねこも)

(たちどまりました。(かめは、)と言って、ここで切ると、読者は「かめはどうするかな？」と思うでしょう。そう思わせておいて、(こねこを)で切って、「こねこを どうするかな？こねこをおどすのかな？」(笑)と思わせておいて、(みつめました)とはぐらかす。それで(こねこも)(かめを みつめました。そして……)。

こねこはわざとそういうふうになんか細かくくぎりながら読者にいろんなことを想像させながらわざとゆっくり読み聞かせる。

子どもにいろいろ想像させる時間というものが必要なのです。想像することに楽しみや喜びがあるわけです。それを教師がうばってはいけません。たいてい教師は、さっさ、さっさと読んでしまうのです。そういう想像をする時間も与えない。

さて、お互いに見つめ合って、それで、どうなるんだろうと思うでしょう。

### ⑩にいきます。

(こねこは、まえあしで／かめを、ポン！と たたきました。)このようすを見てください。おっかなびゆくりで、しりごみした形でしょう、こねこのポーズは。手だけ、前足だけずうつと前へ出して、おしりはずうつと後ろへ引いている(笑)。なんか、おっかなびゆくりという姿勢、ポーズです。

### ⑪

こねこは、めのだまが とびだしそうな かおに なりました！  
なぜって——どうなったと おもいますか？

### ⑩

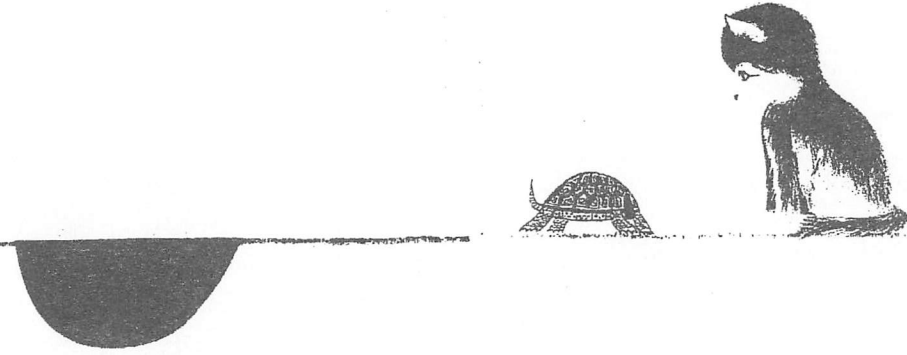
こねこは、まえあしで  
かめを、ポン！ と たたきました。



⑩「こねこは、へめのたまが とびだしそうな かおに なりました！」へなげって——  
どうなったと おもいますか？」と言うと、子どもたちがいろいろ言うでしようね。

おや おや！  
さがりました、  
そして、そこに すわりました。

⑬ こねこは、ひとあし うしろに  
そして、そこに



⑫ かめの くびが、きえて なくなったのです！  
ほらね！  
かめは、ちいさな こうらの なかに、  
くびを ひっこめてしまったのです。

してしまえる／この へんなものを ながめ  
ました。」

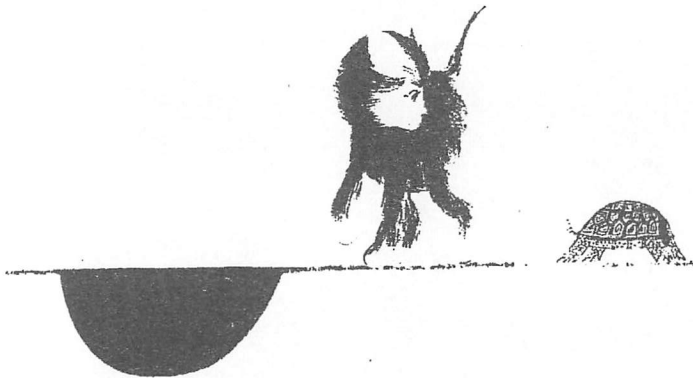
語り手がこねこによりそって語っているの  
がわかりますね。

⑮「もしかしたら……もういちど たたいた  
ら、くびが でてくるかもしれないぞ と、

⑫「かめの くびが、きえて なくなった  
のです！」（笑）「ほらね！／かめは、ちい  
さな こうらの なかに、／くびを ひっ  
こめてしまったのです。」⑬「おや おや！  
こねこは、ひとあし うしろに さがりまし  
た。／そして、そこに すわりました。」  
⑭「やがて、こねこは たちあがると、／か  
めの まわりを、ぐるぐる あるきはじめま  
した。／ゆっくりと、ようじんしいい あ  
るきました。／こねこは、くびを 見えなく

⑮「もしかしたら……もういちど たたいたら、  
くびが でてくるかもしれないぞ と、  
こねこは おもいました。

⑭「やがて、こねこは たちあがると、  
かめの まわりを、ぐるぐる あるきはじめました。  
ゆっくりと、ようじんしいい あるきました。  
こねこは、くびを みえなくしてしまえる  
この へんなものを ながめました。



⑬ なぜって——どうなったと おもいますか？



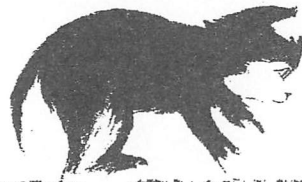
⑭ こねこは、もういちど、ボン！ と かめを たたきました。  
こねこの めだまは、  
また、とびだしそうになりました！

⑮ 〈なぜって——どうなったと おもいますか？〉  
⑯ 〈かめの あしが きえて なくなったので  
す！〉 (笑) 〈かめは、ちいさな こうらの

／こねこは おもいました。〉

⑯ 〈こねこは、もういちど、ボン！と かめ  
を たたきました。／こねこの めだまは、  
また、とびだしそうになりました！〉  
なぜでしょうね。どうなると思えますか？

⑰ こねこは、たちどまって、くびも あしも  
みえなくしてしまえる この へんなものを ながめました。



⑱ かめの あしが きえて なくなったのです！  
かめは、ちいさな こうらの なかに、  
あしを ひっこめてしまったのです。  
おや おや！

⑳ いったい どうなってしまったのか、  
こねこには わかりませんでした。  
それで、こねこは、そこに たったまま、かめを みていました。

㉑ かめは、くびも あしも こうらの なかに ひっこめたまま、  
じっと すわっていました。



なかに、あしを ひっこめてしまったのです。  
／おや おや！

㉑へこねこは、たちどまって、くびも あしも  
も／みえなくしてしまえる この へんなもの  
のを ながめました。

「なんてへんなやつだろう」と思っているよ  
うすがわかりますね。こねこの気持ちがなん  
となくわかるでしょう、こねこのポーズ、よ  
うすを（外の目）で見ることで。

このこねこの（内の目）になって、こねこの  
気持ちになって見ると「なんて、へんなもの  
なんだ！」と。だいたい、首がひっこんだり  
足がひっこんだりするということは、こねこ  
にはとても考えられないことですからね。

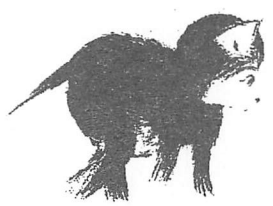
でも、読者は知っているから、このこねこ  
のようすがいちいちおかしいわけです。

㉑へいったい どうなってしまったのか、  
こねこには わかりませんでした。／それで、  
こねこは、そこに たったまま、かめを み  
ていました。

見てください。せなかを大きくまるめて、  
しつぽをピッと立てて「おぞけだつて」とい  
うようすね。ねこというのは、こわいものに  
出会うとか、威嚇するときとかこういうポー  
ズをするでしょう、毛を逆立ててね。

㉑へかめは、くびも あしも こうらの なか  
に ひっこめたまま、／じっと すわってい  
ました。

23 こねこは、ひとあし うしろへ さがりました。



22 しばらくすると、  
かめは そろそろと、こうらから あしを  
だしはじめました。

24 こんどは、かめは、ちいさな はなを /  
こうらから のぞかせました。  
「はな」ですね。

25 「こねこは、もうひとあし うしろへ  
さがりました。」

22 しばらくすると、かめは そろそろと、  
こうらから あしを だしはじめました。  
足を出し始めた。  
23 「こねこは、ひとあし うしろへ さがり  
ました。」  
気味がわるいわけね。

25 こねこは、  
もうひとあし うしろへ さがりました。

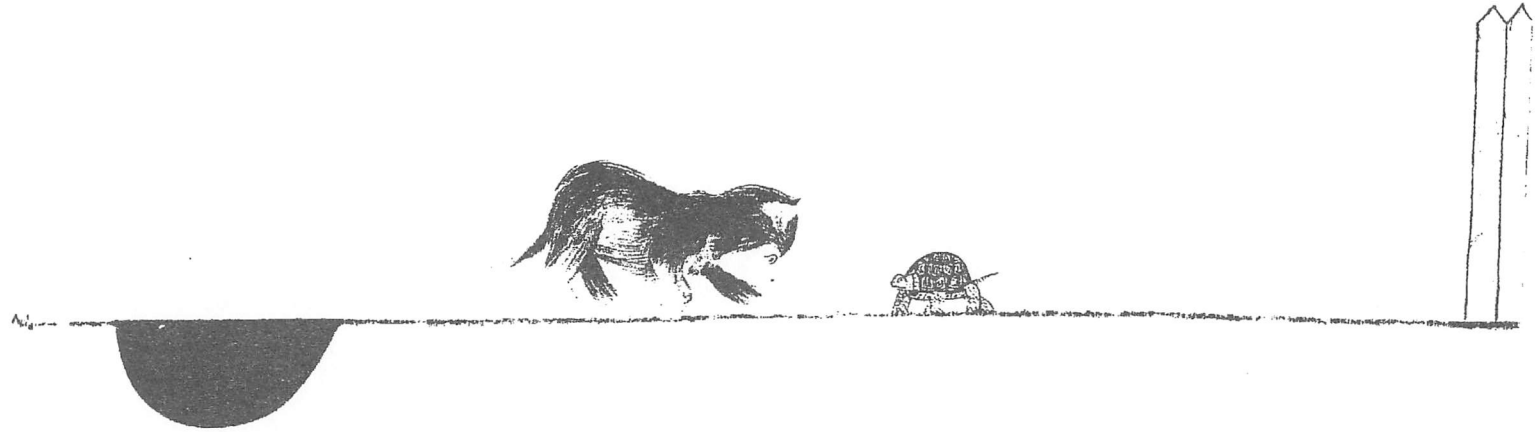


24 こんどは、かめは、ちいさな はなを  
こうらから のぞかせました。

26 すると、かめは、くび せんたいを、  
こうらから だしました。

27 こねこは、また もうひとあし うしろへ  
さがりました。

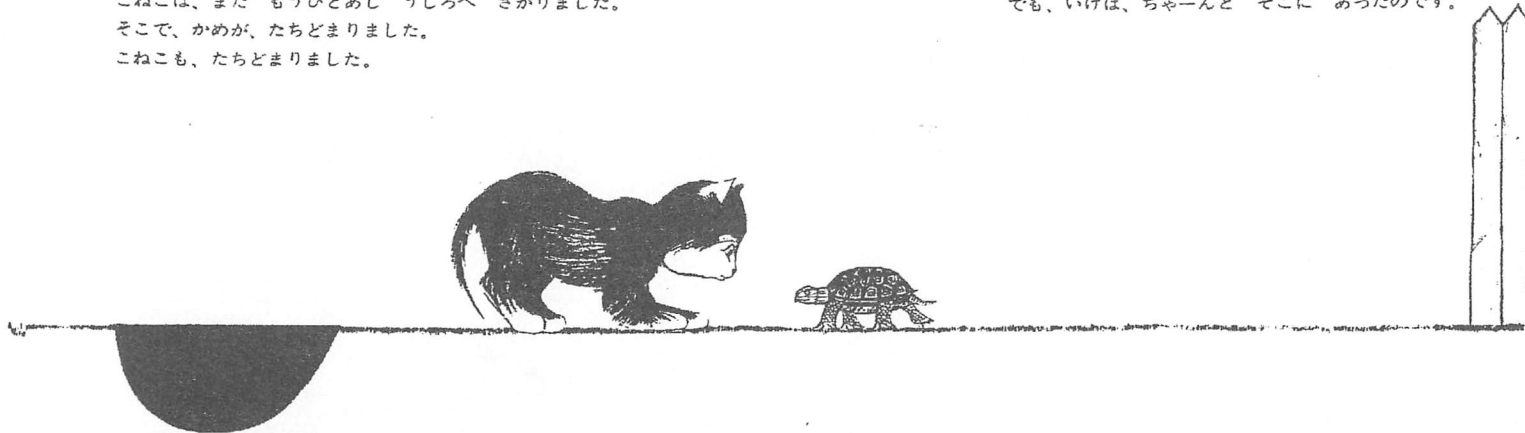
28 へすると、かめは、こねこのほうへ ひと  
あし ちかづいてきました。／こねこは、も  
うひとあし うしろへ さがりました。／か



26 へすると、かめは、くびせんたいを、／こ  
うらから だしました。)  
27 へこねこは、また もうひとあし うしろ  
へ／さがりました。)

28 すると、かめは、こねこのほうへ ひとあし ちかづいてきました。  
こねこは、もうひとあし うしろへ さがりました。  
かめは、また ひとあし まえへ できました。  
こねこは、また もうひとあし うしろへ さがりました。  
そこで、かめが、たちどまりました。  
こねこも、たちどまりました。

29 こねこは、うしろむきに あるいたので、  
うしろに いけが あるのを  
しりませんでした。  
でも、いけは、ちゃーんと そこに あったのです。



めは、またひとあし まえへ できてきました。／＼こねこは、またもうひとあし うしろへ さがりました。そこで、かめが、たちどまりました。／＼こねこも、たちどまりました。

ここのところをへよみきかせくするとき、どういうふうなへよみきかせくを、するか。ゆっくり、ことばを一つ一つ切りながら、へかめはへこねこのほうへへひとあしへちかづいてきました」というふうに読んでいく。

へこねこはへもうひとあしへうしろへへさがりました。へかめはへまたへひとあしへへまえへ できてきました。へこねこはへまたへもうひとあし うしろへ さがりました。

へそこでへかめがへと、ここの切ると、「かめがどうするのかな？」と思いますね。

そういうふうにおもわせておいて、へたちどまりました。そしてへこねこも、たちどまりました」と語る。

その次にいきます。

へこねこは、うしろむきに あるいていたので、／＼うしろに いけが あるのを しりませんでした。(笑)へでも、いけは、ちゃんとしてそこに あったのです。(笑)

### 形像と形像の相関

ところで、ここまで読者は池のことをまったく意識していないんですよ。本当はずっと池が描いてあるんですよ。全部の場面にね。しかもあざやかな青い色が塗ってあるんですよ。非常に目立つように描いてあるんだけど、しかし人間というのは、そこに心がないと、見ても見えないのです。それを「心ここにあらざれば、見れども見えず」と言う。中国のことわざです。人間というのは、あることに注意していると、ほかのことを意識しないのです。

それはどういうことかという、たとえば、今、私たちの目の中にはすべての物が映っているんです。耳にはすべての音が入っているんです。でも、たとえば、私のこの話に興味・関心が集中していると、外の雑音が気にならないというか、あるいは意識しないということがある。録音なんかしてみるとよくわかるんですけども、録音を再生すると、「えっ、こんなに外の雑音があったのか！」と気付くことがあります。でも実際に話を聞くときに、それに集中していると、まわりの音が気にならないというか、聞こえなくなっている。実は耳には入っているんですよ。耳に入っているんですけども、耳や目から入った情報が脳へ行くと、脳のところ、スイッチがあつて、興味・関心のあるものだけを拾って、その他はぜんぶカットしてしまう。そういう働きが脳にはあるんですね。

今までみなさんは、かめとこねこの関係だけを見てきたでしょう。また、そこを語ってきましたね。だから、そこに集中しているから、後ろに池があるということ、目に入っ

ていても、意識していないわけです。

だから、ここまでは、かめとこねこの関係だけが問題になっていた。

池がわざわざ描いてあるんだけど、今までは、かめとこねこの形象の相関、ここへ読者の関心が向けられている。注意がそこにそそがれている。

ところが、ここで語り手がわざわざ「いけは、ちゃん」とそこに「あつたのです」と言う、今度はこの池との関係が問題になってくる。

初めは、かめとこねこの関係。ここに興味・関心が向いていた。ところが、「いけは、ちゃん」とそこに「あつたのです」ということで、今度は、かめとこねこだけじゃなくて、こねこと池の関係、これが気になってくるんです。

しかも、どういうふうになつてくるかという、もう、このこねこが池のすぐそばまで来ているでしょう、あとずさりしてね。

このこねこは、うしろに池があるのを知っていますか。知らないんですね。意識していません。でも、読者は知っている。「人物

こねこは知らない、読者は知っている」、うしろに池があるということ。この関係です。

これがドラマを作り出す一つの関係になるのです。

### 事実とイメージ

どういふイメージになるかというと、かめとこねこのやりとりだけがイメージになるのではなく、こねこと池との関係がイメージとしてある。だから読者の中に、なんか、こねこが後ろへ下がってきて池に落ちるんじゃないかという危機感が出てくるわけです。

次です。

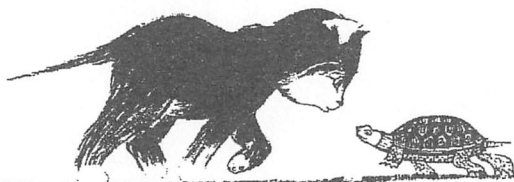
③①（やがて、かめは、ひとあし、／もうひとあし、／また　もうひとあし／まえへ　でてきました。）とありますね。

次の場面へいきますよ。

③②（そして　こねこは、ひとあし、／もうひ

③①　そして　こねこは、ひとあし、  
もうひとあし、  
また　もうひとあし  
うしろへ　さがりました。  
ととう、いけの　すぐ　そばまで　きてしまいました。

③②　やがて、かめは、ひとあし、  
もうひとあし、  
また　もうひとあし  
まえへ　でてきました。





とあし／うしろへ さがりました。／とうとう、いけの すぐ そばまで きてしまいました。)

とありますね。

ちよっと、みなさん、前の(28)ばめんを見てください。(29)ばめんのところでは、かめが一足近づく。こねこが一足後ろへ下がる。かめがまた一足前へ出る。こねこがまた一足後ろへ下がる、と、かめ、こねこ、かめ、こねこ、かめ、こねこと交互に、出て来る、下がる、出て来る、下がるとなっていますよ。これが事実ですね。事実—ことがら。

ところが、(30)ばめんをはさんで、(31)ばめんと(32)ばめんは、どうなっていますか。(33)かめはひとあし、／もうひとあし、／また もうひとあし／まえへ できてきました。)

(34)そして こねこは、ひとあし、／もうひとあし、また もうひとあし／うしろへ さがりました。／とうとう、いけの すぐ そばまで きてしまいました。／となっていました。

これは、かめが三步出てきて、それからこねこが三步うしろへ下がったということでしょうかね。どう思いますか。

この、書いてあることを読むと、まあ、かめが一步、二歩、三步前へ出て来る。それからこねこが一步、二歩、三步下がると、そういう書き方ですよ。

(会場の声—今までのことを続けて読むと、なんか交互に……)

うん、やっぱり交互にでしょうね。事実として、ことがらとして言えばね。かめが三步前へ出てきて、それからこねこが三步うしろへ下がるということじゃないと思うんですよ。やっぱり、かめが一步前へ出る、こねこが一步さがる。そのくり返し。前の のところ で言ったのと同じくり返しだと思うんです、ことがらとして言えばね。

ところが、なぜ、こねこは、事実とちがうこんな語り方をするんでしょう。

かめは、ひとあし、／もうひとあし、／また もうひとあし／まえへ できてきました。／ところで、ここをどういうふうに読むんでしょうね。

初めのところで、かめはゆつくり歩くということを強調して語っていましたね。ですから途中はゆつくりと読むべきでしょう。

それからここへ来て、かめとこねこだけじゃなくて池との関係が出てきた。読者の意識の中には、こねこのうしろに池があるということがはっきり意識されているわけですね。それを前提にして、このばめんがある。

ということ、事実、かめは一足、もう一足と、ゆつくり歩いているわけなんです。しかも、かめが一步前へ出てきたら、こねこが一步後ろへさがるといふ、そのことも考えると、かめの一足と次の一足との間にはずいぶん間があるはずですよ。そうでしょう、事実として言えばね。でも、これは事実を語っているんじゃないかね、イメージを、どう

いうイメージを読者に与えるかという、イメージのプロセスがだいじなんですね。

そうすると、ここでは、いかにもかめがこねこに対してぐいぐいと迫っている感じ、こねこを押しやっけていく感じ。だから（かめは、ひとあし、／もうひとあし／また　もうひとあし／まえへ　でてきました。）とたたみかけて、かめがまるでこねこにおそいかかっているような勢いを見せた読み方をするのです。すると読者は圧迫感があるんですよ。なんか、読者はこねこと一緒にかめからぐいぐいと迫ってこられる感じね。それをまず作り出すということ。これは、どういうイメージをつくり、どういう体験を読者にさせるかということなんですね。緊迫感を読者にもたせる。

### 異化体験・同化体験

そして次の②に行くとき、へそして　こねこは、ひとあし、／もう　ひとあし、／また　もうひとあし／うしろへ　さがりました。あ、あぶない、あぶない、あぶない、あぶないという感じ。「あぶない、あぶない」というのは、こねこがそう思っているのではない。こねこは、ただ目の前のかめに気をとられているだけです。

でも読者のほうが、うしろにある池と、うしろに下がってくるこねこのこと、この「形象と形象の相関関係」に注目して、だから「あ、あぶない、あぶない」という感じで見ているわけです。

結局、こねこは知らない、うしろに池があるのを。しかし読者は知っている。だから、ハラハラ、ドキドキするわけです。これは「体験」ですね。こねこはそういう体験をしているわけじゃない。しかし、読者が体験する。これを読者の「異化体験」といいます。

こねこと「同化体験」すると、こねこは目の前のかめに気をとられているだけです。目の前の、何か知らないへんなものが自分の目の前にぐいぐいと迫ってくる感じで、そっちの方へ気をとられている。そっちの方が意識されている。だから、うしろの池の方はぜんぜん意識されていない。でも、読者はそれを知っている。これがドラマを作り出すわけです。

ですから、③のばめんのこねこのところも、へこねこは、ひとあし、／もうひとあし、また　もうひとあし／うしろへ　さがりました。というふうになっていて、「あ、あ、もう落ちる、落ちる」というふうに思わせておいて、へとうとう、いけの　すぐ　そばまで　きてしまいました」というから、なんかもう、こねこが池の方に追いたてられた感じですね。実際はこねこもやはり、ゆっくり歩いてるんですよ。かめの足に合わせてゆっくり一足、また一足と。でも、ここをゆっくり読んじゃダメなんです。切迫した感じで、たたみかけるように読んでいくということですね。

### イメージの筋

「イメージの筋」という意味がわかりますか。「できごとの筋」を語っているんじゃない

いですよ。イメージのプロセス。どんなイメージかという、読者にハラハラドキドキさせる、体験をさせるために、そういうイメージの作り方をすることなんです。

（とうとう、いけの すぐ そばまで きてしまいました）という、「あ、もう次の一足で落ちる」という瀬戸際ですね。

そこですよ、次の③に（かめが たちどまりました。／こねこも たちどまりました。）とありますね。ここは、（かめが）（強い口調で）と読んでやるんですよ。そうすると「あつ！」と思うでしょう。そこで（たちどまりました）（静かな口調で）とこうやる。そうすると「あれ？」というはぐらかされた感じですね。つまり、ここまで追い込んでおいてから、そこでパッとストップしてしまってください。ここはだいじなところですよ。

そして、（こねこも）（たちどまりました。）（かめは、）（こねこを）（みつめました。）と、わざとゆっくり、じらす。（こねこも、）（かめを）（見つめました。）と一つ一つ切っ

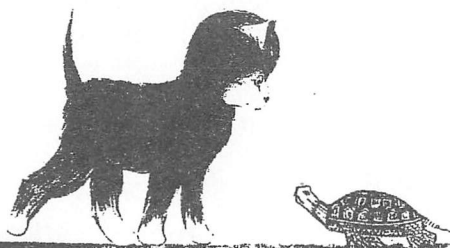
て読む。こうすると、読者というのはおもしろいもので、「あ、落ちる、落ちる」とハラ

ハラドキドキして、その寸前まで来たときに話がストップして、こんどは悠長なやりとりになるでしょう、するとこんどは「落ちるもんなら早く落ちればいいのに。落とすのなら早く落とせ！」という感じになるでしょう。これが、落として命がなくなるというのなら別ですよ。それはまた別ですけど。かわいいこねこですから、大きい深い池に落ちてしまつたらそれつきり、死が待っている、というのなら、それはダメですけれども。ただかこの程度の小さな池でしょう。この程度の池だから、落ちて命がなくなることはない。でもやはり落ちてはかわいそうという感じがありますね、そういうハラハラドキドキですよ。ですから、ここでは、わざと読者に、はがゆい思いをさせるんですね。じらすわけなんです。

要するに、お話をするというのは、子どもを持ち上げたり落したり、ハラハラさせたりドキドキさせたり、イライラさせたり、あ

③2 かめが たちどまりました。  
こねこも たちどまりました。  
かめは、こねこを みつめました。  
こねこも、かめを みつめました。  
それから、かめは、もう ひとあし まえへ できました。  
それで、こねこも、もう ひとあし うしろへ さがりました。

③3 たいへん！

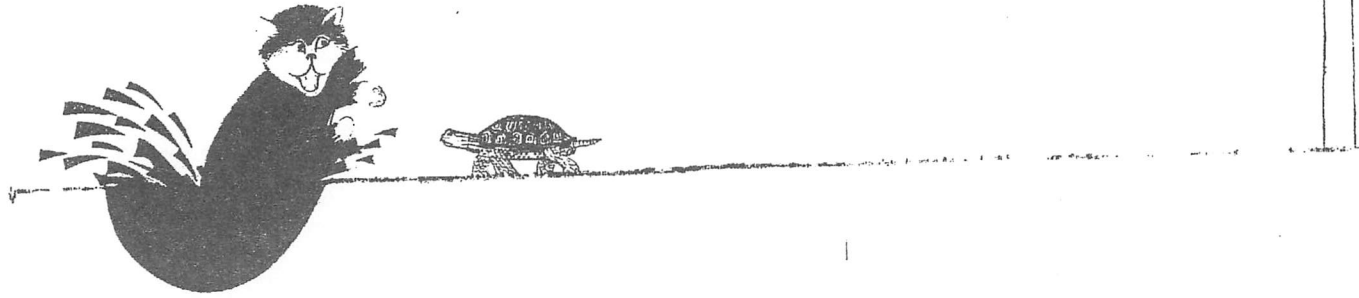


ねこは、みずが きれいなのです。  
ときどき  
のむ ほかはね。  
それで……

35

ハシヤーン！  
こねこは、いけに  
おっこちてしまいました。

34



れやこれやとやるわけなんですよ。そうでない子どもはおもしろくない。

読者というのは、このこねこをイヤなこねことは思っていませんからね。「なんかかわいらしいこねこだな」とどこかで思っていますから、やはり池に落ちるのはかわいそう、でも、なんか落ちたらおもしろそう、という矛盾した気持ちをもっているんですね。

32の絵を見てください。もう、あと一足で池に落ちるでしょう。片足は池にのっかっているようなものですからね。だから、わざとここでゆっくりへみつめました。ここで見つめなくたっていいんだけどね。またへこねこも、みつめました」とね。

へそれから、かめは、もう ひとあし まえへ できました。／それで、こねこも、もう ひとあし うしろへ さがりました。／ということ(33)へたいへん！ということになる。

で、へバシヤーン！と落っこちるといいう話になるわけです。見てください。

34へバシヤーン！／こねこは、いけに／おっこちてしまいました。

おっこちてしまったって、この程度ですからね。たいしたことはないんだけど、なにしろ(35)ねこは、みずが きれいなのです。／ときどき／のむ ほかはね。(笑)  
へそれで……

③⑧ けれども、かめは、そのまま まっすぐ  
すすんで、／みずの なかへ はいっていき  
きました。／なぜって、かめは、みずが  
だいすきだからです。

③⑥ こねこは、いけを とびだすと、  
かめを とびこして、  
いっしょうけんめい にげました。



③⑦ そして、となりの じぶんの うちへ、  
かえっていきました。



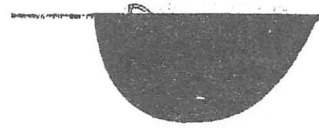
③⑧ けれども かめは、そのまま まっすぐ すすんで、  
みずの なかへ はいっていきました。  
なぜって、かめは、みずが だいすきだからです。

③⑥ こねこは、いけを とびだすと、／かめ  
を とびこして、／いっしょうけんめい に  
げしました。  
③⑦ へそして、となりの じぶんの うちへ、  
／かえっていきました。



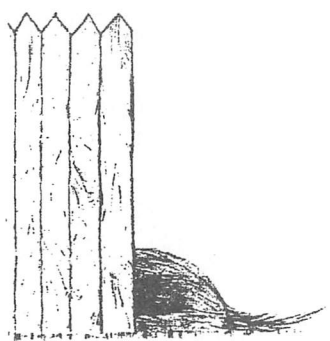
39

それからというものは、こねこは、  
にわの なかへ はいって は きませんでした。  
かきねのところまで きて、  
のぞいて、かめを みているだけでした。  
けっして、にわへ はいってこようとは しませんでした。  
そして もう、けっして けっして、  
うしろむきに あるいたりなんか しませんでした。



40  
「なぜって、こねこは、みずが だいき  
らいだからですー」  
はい、こゝで終わり。

40  
なぜって、こねこは、みずが だいきらいだからです！



さて、さいごのばめんです。  
39  
「それからというものは、こねこは、  
にわの なかへ はいって は きませんでした。  
かきねのところまで きて、  
のぞいて、かめを みているだけでした。  
けっして、にわへ はいってこようとは しません  
でした。  
そして、もう、けっして、けっして、  
うしろむきに あるいたりなんか  
しませんでした。」(笑)

## 物語の教訓

ところで、なんで、みなさんはへうしろむきに あるいたりなんか しませんでした？  
というところで笑ったの？何がおかしいの？

(会場から)「かしこくなつたなあ？みんなは今、笑ったでしょう。笑ったんだけど、笑

ったわけは？

人間というのは、わけがわかつてやることと、わけがわからずに笑ったり泣いたりして、  
なんであの時自分は泣いたのかわからない、なんで笑ったのか定かでない、ということが  
あります。だから、わたしが言つて聞かせます。(笑)

なんで笑ったかというと、これから先このねこはもう後ろ向きに歩いたりしなくなつた  
というわけね。でも、人間というのは、後ろ向きに歩いたつていいんですよ、必要な時は。  
時と場合によつて。

このねこが失敗したのは、後ろ向きになつたからではなくて、後ろに注意しなかつたか  
らです。後ろに池があるということに注意したら、後ろ向きに歩いたつていいのです。要  
するに、このねこは、目の前のことにだけ気をとられている。

ねこだけではありません。人間は、目の前のことに気をとられると、もうそれしか見え  
ない。それしか見えない。後ろが見えない。まわりが見えない。そこで、  
そういう失敗をするということになる。

だから、後ろ向きに歩くということが悪いのではなくて、後ろに注意しないということ  
が悪いのです。

自動車の運転だつてそうですよ。バックするのがいけないのでしょうか。バックしてぶ  
つかるのがいけないのです。ですから、後ろに注意すればいいのです。いっぺん、後ろに  
注意しなくてぶつかったからといって「もう私は後ろ向きには車は動かさないと」言つた  
ら、どう？笑われるでしょう。それなんですよ。

なぜ、このねこは後ろ向きになつて失敗したかというと、後ろ向きになつたからではな  
くて、後ろに注意しなかつたからなのです。

そのちがいをわからなくちゃいけませんね。

みなさんは、体験的にそれがパツとわかるから笑つちやうんですよ。笑つたというのは、  
このねこが(もう) けつして けつして、へうしろむきに あるいたりなんか しませ  
んでした(という)から笑つたわけです。理屈をいえば、そういうことです。

ですから、この物語の教訓は「前ばかり見てはいかんよ」ということなんです。後ろ向  
きに歩いてはいかん(ということ)を言っているのではなくて、まわりに気をつけなさい、後  
ろに気をつけなさい(ということ)なんです。そうでないと失敗する。後ろ向きに歩くのがい

けないと言っているのではない。目の前のことにだけ気をとられてしまうとまわりが見えなくなる、後ろが見えなくなる。そうすると人間というのは失敗することがある。そのことに注意しなさいということなんです。

## ドラマ

だから、ドラマというのは、事件の中にだけドラマがあるのではなくて、そのイメージを作っていくなかで、読者の中にドラマが起きるのです。それはわかりますか。

読者が、かめとこねことの相関関係、こねこと池との相関関係、この両方の相関関係を見ていて、読者のなかにドラマが引き起こされる。

ドラマというのは絵本の中にあるのではなくて、絵本と読者との相関関係の中にドラマというものが引き起こされる。

この場合、この池という（もの）との関係が、ドラマに必要なということがわかりますね。ドラマというと、ふつう人物と人物の関係、この関係の中にだけドラマが起きるよるうに思うけれども、決して人物と人物だけじゃない。やっぱり、そこにある、たとえば池なら池という（もの）をもふくめた関係ね、その関係を読者がどう見るか、読者にどう見せるか、そことの関係の中にドラマというものが起きる。こういうことなんです。

ここでは、できごとの筋どおりには書いてありませんでした。ここをまちがえないようにしてください。ここをできごとの筋になおして読んだらなんにもならない。やっぱり、ここに書いてある通り、イメージを作る。グッ、グッ、グッ。実際の、リアルに考えたかめの歩みはゆっくりゆっくりですけども、ゆっくり読んじやいけないところがある。こねこの方に迫ってくるイメージを与えるような読み方をする。そして、迫ってくる感じを読者も共感する、共体験する。異化体験できるということです。

それから、イメージと体験をどう作っていくかというプロセス。これが物語の「筋」ということなんです。ですから事件の筋というと、ここが狂ってくるでしょう。これをまた事件の筋通りに置き換えて読んじやいけないんです。書いてある通りに読まなくちやいせん。

書いてある通りと言うけど、どういうイメージを作者は読者に与えたいか、そこを計算した読み聞かせの仕方をしなくちやいけませんね。

## 注意を向けさせる

さて、ついからですから、お話ししておきます。おもしろいですね。みなさんはさつき、この青い池というものをずうっと意識しなかったでしょう。ところが、へいけは、ちやーんとそこに あったのです」という所から、逆に池を意識して、池とこねこの関係に目を向けるようになりました。

ちやうど読者も、目の前のかめとこねこに目をうばわれていると池が見えなくなるので



すよ。わかりますね。で、池というものに注意を向けさせると、池とこねこの関係がこんどはメインになってくるんですね、かめじやなくて。ほら、そういうふうになるんですよ。

「こんなにはつきり青く「池です」と言わんばかりに描いてあるのに、人間というものは、目に映っているんだけど意識していない。みなさんは、ずうっと池のことは忘れていたでしょう。後ろにちゃんと池はあったのです、と言われて、「あ、そうだ池があった」、いや池があったどころじゃなくて「池へねこが落ちる！」となるわけですね。人間というものはそういうものなんです。そこに注意を向けると他のことはお留守になる。文字通り読者がそれを経験したでしょう、同じことを。

でも、だからといって、すべてに注意しなさいと言っちゃいかんのですよ。必要なところへ注意を向けなさいということ。ここはだいたいなところ。何にでも注意したら、それは注意が分散するだけです。注意というものは集中しなきゃいかん。だから、どこへ集中するか、どこへ集中させるかということが問題です。

授業でもそうですよ。何でも、子どもに「注意を向けなさい」というのはばかげた指導です。今は、ここにこそ注意を向けなさい、ここが、今日を向けるところ、注意をするところだよ、と指導することが必要なのです。

たとえば、こういうことがあります。

高知県のある南国という市があります。私は、その小学校一年生に詩の授業をしてほしいといわれたことがあります。それで、行きました。それで、校長先生が、「なにしろ、あのクラスはとびきりにぎやかなクラスです」とおっしゃって、なるほど受け持ちのまだ若い女の先生が声をからしています。子どもがワンワンやっているので、気の毒そうに「この学級はこつちを向きなさいといってもぜんぜん注意をむけない子どもたちですけど・・・」と言つて、私にぼんと渡したわけです。それで私は「ウーン、どうしよう」と思いましたね。中国の人が書いた「かたつむり」という詩を授業することになっていて、私は教壇に立ったのですが、子どもたちは私をチラッと見るけど、すぐにもワーワーやっている。(笑)それで受け持ちの先生が「ほら、ほら、ハイ、ハイ」と必死になって言うけども、ぜんぜん静まらない。



そこで、私はだまって黒板の方へ向いて、何をしたかというのと、「ハイこつち向いて」とは言わないですよ。だまって、こんなふうを描いたら、気付いた子が「あれ？うずまきだ」とか言うわけです。そしたら五、六人の子がはっとして向くわけね。「うーん、うずまきかな？」と言っ

て目玉を書き加えていくと「あ、かたつむりだ」とか口々に言う。だまっているのに、みんなが黒板の方を向いた。「ハイ、こつちを向きなさい」と言つて向くもんじゃありませんよ。だまってこういうふうにやつていけば「何だろ？」「何だろ？」「何だろ？」と思

うから、何人が向く。何人が向くと他の者も「え、何だろう？」と向く。みんなが向く。うずまきだ、とかかたつむりだとか言い合って「あつ、かたつむりだあ！」と言うわけですね。

それで、「うん、これは？」と言うと「つのだ！」「目玉！」「うん、かたつむりだね。今日は、かたつむりの詩だよ」とか言つて、〈かたつむり〉という題名を書く。

「こつちを向きなさい！」なんていうのは野暮です。みなさんの授業はたいいていそうです。興味があれば子どもはそつちを向くんです。

しかも、これから「かたつむり」の詩をやるんだから、ちょうどいいわけですね。

子どもは興味をもつてそつちに目を向けるわけだから、他のことには興味・関心がなくなる。つまり教師の方に注意を向けたわけですね。そこへ乗つけて授業を運んでいく。

だから、「ハイ、静かに！」「こつちを向いて」というのは野暮です。それを言うということはもう教師失格です。(笑) 失格というところがちよつと言葉がきついかも知れないが、失敗ですね。

私は一度試したことがあります。街の中を歩いていて、立ち止まつてこうやって上を見上げたんですよ。そしたら、通っている人が私の傍らに来て同じように見上げるんですよ。

(笑) 何もありませんよ。何もありませんよ。「うん？」と首をかしげて立ち去っていく。中には「何かあるんですか？」「いや、何もないですよ。」(笑)「何もないのに、なんで見るんだろ？」という顔をして行く。わかりますか。

大人でもこうですから、ましてや子どもというのは好奇心旺盛だから。興味・関心がある方へ目を向ける。そういうものです。興味・関心がないと向けない。

このねこはそうです。目の前のかめに気をとられているから、後ろには注意がいけない。もともと、本当は後ろに池があることは知っているから、後ろには注意がいけない。ここではもう気に留めていないわけです。そういうことです。

読者だつてそうでしょう。話者は池があるということを最初に語っています。池があつてかめが住んでいると語っていますね。そして、ちゃんと池が青く塗つてあるのだから、目には強く映つてはいるのでしょ。でも「心ここにあらざれば」で見えないわけですね。

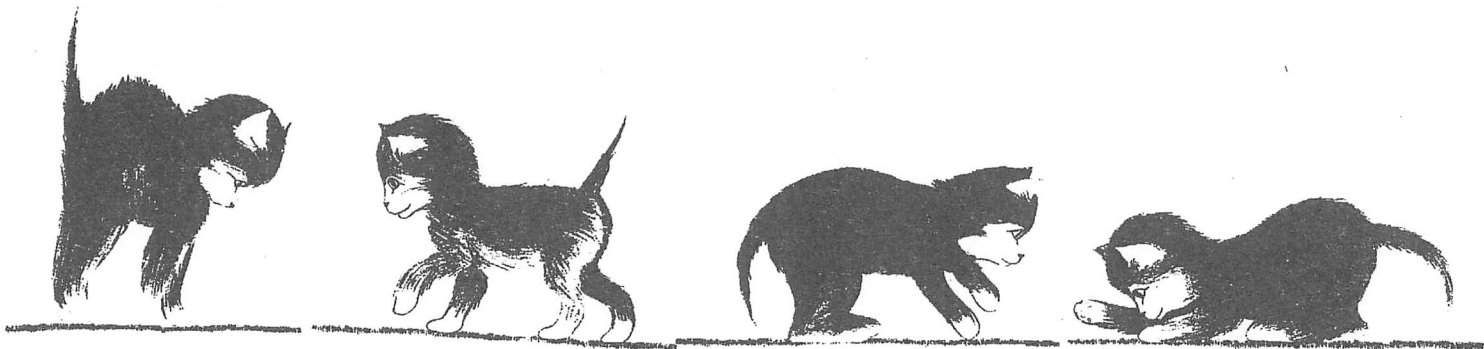
そういう絵本なんです。

### 絵の指導の教材として

私は、ある幼稚園の研究会で、この絵本を使って話をしたことがあります。それは何のことでかと言いますと、子どもの絵の指導です。絵を描くことについてです。子どもはたとえニワトリを描かせると、みんな横を向いている姿を描くんですよ。みんな同じ様な描き方をしますね。「これがニワトリです」みたいな。「ニワトリです」とか「おかあさんです」というような絵の描き方をしますね。そういう絵の描き方はダメだと私はいうわ

けです。

それで、これを使って話をしました。  
見てください。

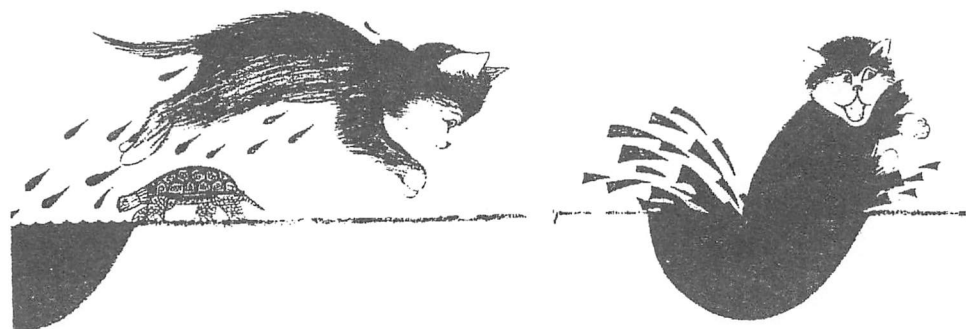


このねこは、ま、かめの方もですけど、このねこの絵は、ねこのポーズ、姿勢、毛なみを描いています。毛の線を描いているんですよ。たとえば、おっかなびつくりの時は、しりごみして、手だけ前へ出して、しっぽなんかは、おっかなびつくりの曲がっています。こういうポーズから、このねこはおっかなびつくりでやっているという気持ちと様子が具体的に表れています。それから、この毛並みの描き方。たとえば、何か「へえ、何だろう、こいつ」とおじげづいている時の絵がありましたね。それから、意気揚々と歩いているときはしっぽをピンと立てて足取りも軽く歩いているという感じですね。ところが、「これ、何だろうな。へんなやつだ」と思って少しびっくりしているときの感じというのがありましたよね。背を丸めて、自分を相手に大きく見せようとして、しっぽもパツと上へ向けて、毛もおぞけだっていますね。

こんなふうには、一般的なねこを描くんじゃなくて、びっくりしているねこ、意気揚々と歩いているねこ、こわがつているねこ。それから「えっ？何？」とものすごく興味を示している時のねこ、というふうな「何々しているねこ」というふうには描くということの指導です。

お母さんの絵を描くというと「これがお母さんです」というふうな指名手配用のような（笑）絵を描くでしょう。そうじゃなくて「笑っているお母さん」とか「怒っているお母さん」とか、あるいは「泣いているお母さん」とか、「何々しているお母さん」というふうには描きなさいという指導。その一つの例としての絵本です。こういうことは、子どもにはむずかしいですが、でも一つの例として。このねこの絵はぜんぶ「これはねこです」とし

て描いているのではない。ある時は、相手をおどかさうとしている。その時のねこのポーズと毛並みで、そのことがはっきりわかる。



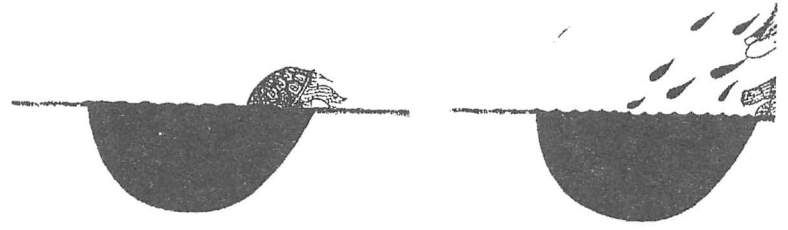
そういう話をしたんですよ。それは、愛知県の焼物の町の幼稚園の先生たちの会でしたが、その後、そこへ行きましたら、あれから子どもたちがそういう絵を描くようになったというのでした。たとえばニワトリというと、それまでは「これがニワトリです」というような絵でした。それが、けんかをするときは羽根をパァーツと立てるじゃないですか、そういう絵とか、ひとつひとつ表情がある。これは怒っているニワトリとか、これは何々している時のねとか犬とか、そういう絵を子どもが描くようになった。だから十人十色の絵が出て来る。お母さんの絵だって、顔写真みたいなものでなくなった。

これは絵の話ですけど、人間というのは必ず何かしているわけです。寝ているか飯を食っているか酒を飲んでいるか笑っているか勉強しているか遊んでいるか・・・です。そのことをしっかりおさえた形で描かせる。たいてい幼稚園、低学年、あるいは小学校高学年でもそうだけど、「お友だちを描きましょう」とかやるじゃないですか。そうすると座ったままで正面から描くというようなことばかりやるでしょう。そうじゃなくて、どういう時のお友だちとか、つまり何かをしている時のお友だちとか、ばめん設定をして、条件づけをして描かせる。人間でも何でも、ある条件のもとに生きていますから、その条件の中における何かということです。つまり何かとの関係です。この絵本で言うと、かめとの関係におけるねこの姿です。

それから、細かいようですが、ねこがバシヤーンと落ち込んだときにはねる水はどういうふうを描いてありますか。直線で描いてありますね。くらべて見るとよくわかります。左の、したたっている水は丸くなっているでしょう、先の方が。バシヤンとはねた時の水は先が切れているでしょう、鋭角的に。ぜんぜん違うでしょう。水のしずくが描き分けてあります。こういう細かい工夫があります。

そして、池に波が立っている。これはとがった波です。小さいけれども、ギザギザののこぎりの歯のような波。ところが、静まった後の波は、やわらかいまるい波。細かいことだけど、気を使っていますね。

絵本というのは絵が描いてあるわけだから、それを使って絵の指導をすることもできる。たとえば子どもに「こっちはとがった波だね。こっちはまるい波だね。どうしてかな？」と言うと、「こっちは、まだ激しくゆれている時、こっちは静まってきたときだから波の立ち方がち



がう」とわかる。

しずくも、飛んで逃げる時はスピードがあるから池を飛び出す時よりも細長くなっている。

それから、かけていく時の足。ものすごい速さでかけていく時はこうなんですよ。

ま、ちよつとしたことですけども、しっぽでも、どういう時にしっぽをどうしているかと見ていくとおもしろいですよ。ピンと立っている時とかいろいろです。

